

4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3

4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9

70

60

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

歐式部日記停註

下



紫式部日記傍註下

右圖文庫

左傳昭公元年
先王之樂所以
節百事也。故有
五節。杜預註五
聲之節。又本朝
禮觴詳見後補。

行房卿

鬢

管

端

十一月一日
むせらうへサ日よりつる。侍後宰相兼隆卿よまひ姫のり。さくさと
つらも。右宰相中將のむせらに。角庭行房卿アレトモ、
くわはててト。とと一よみひよとたものいれく。葉
梅乃枝桃。立最。書
おまのじ。ひかりますて。あふ。ひまどり。あらう
つらう。火ひく。けり。うもーたがき。あ
ト。りのりく。と。わく。うつ。あのみや
のれりと。人のよとのもあく。そくかく。及上人乃

卷之三

傳付隨舞姬女房也許見後補

通鑑付隨舞姬下女也詳見後補

主
福澄注王
行成卿
忍笑
今向
傳
相
顔
贊
火影
寅
卯日
卯日
主
御前
尾張

斐春宮亮とへ
藤原宣孝の男
隆仕ゆき是紫
式部のひろよ達
子なり

れ。さすがに事とかう。もとものいもかうともふ。
ううてひてゆううらうも。もてあけもひもと
えゆにまよつと。あゆくよぢんわくとまにく
かづれからぬうふ。ばらんの日乃きのわくら
もし。まろうううわば。まてりあくまど。ふ
りとすくま。あゆこちびつりてまふ。
並
あひきじゆうれてゆくわ
ゆうてゆうるもく。さあうもく。我もこれ
りとさとうへりかひて。ういてうやまとしも
す。めううう。おとくゆうけやうゆもじゆう。
勝
氣伶亮

あさめし。まくらをすり下さ。ひら中扇にあふまえ
まくらをすり下さ。そなれさんもお立ち墨で
まくら。あてもあくね墨身墨やとひら。ひる。
人よか墨とあくね墨よこら。はふわ墨とくと
あくね墨り墨をうまく墨や。てものう
けよ墨ハ青の。め代白いも白つ白を白か白。ひ
ちに。若宰相のヨリウ。めいろと白あて。すつ仕の
ヨリウのうち。ひりへ獨ひとまがよハ丹波と。宰相の
兼隆卿行成卿
中ね柏ハ表いと著すに。カタ柏もお表。うね柏だ
あくね柏。うね柏ひ農からう。かざ柏あ下中小。

とくりハ蒲え蒲アサハ蒲。まくら
くある。あくね墨。わのいろあひはやかと下仕のひと白
きくに。あふきとくとて。六位のくく人白じく白小
の代白まやう白。が白。お白。彼白
とくね白。ヨリウとくね白。まの白。女白ハ白。お白
あくね白。又白そも。お白。ひ吟。あくね白。お白
うまで。うちのさんと。ありひ白き白や。あくね白。
足白も。あくね白。まくら。あくね白。あくね白。
段白の。わと。あくね白。あくね白。あくね白。
駒過。あくね白。あくね白。あくね白。あくね白。あくね白。
あくね白。あくね白。あくね白。あくね白。あくね白。
小かしつ白。あくね白。あくね白。あくね白。

別の事はござりません。お詫びと申すのも

れまへり。あらへたるをうながす。あらま
かともあまへととのじゆすれどかとく
もよのあはまへ。ヨリとつづけよてか。あひや
にき。さくまをせば、さかしゆくへ。あま、うきよ
とて、とこどえをそ、不うちうきよ
今て、こき中納言のゆ生じより左京のまほん
と。だやかまへとく行りとめくわへたんと見く
るきわとあはよ、もととくす。かへとあまそいつ
へくらむとよりうつへ、女帝と。かへとあまそいつ
かくわくまへ。まほくらむとくとくじうりりが
うううひとあされとみきらすきわとくまほくらむの

このとおりこすりへんよ。内大臣とくせてぬよる。ソリソニ
のやふ。あらうのれり流とくせきとく。かくもとくを
て。ちんのく白うゆのかうひと。つひの君毛髪を櫻
ほききに代替す。それゆにあてにうちいそ
そ。日うけのゆきあり。とくかくめりて。あや
よのくすして。ひおろふとぞくへ。かのわくはあうと
ひえねあ。かくもとく計無とく。うかうりうりとそ
うせ。うきうき歲たまきりと。とく。うかうり
くうと。うみくもはうのゆりて物財らんを。ほひひ
ゑれながうて。やとものくくわとかひきうど。うの
玉

今ぬハまひハよハめハ見ヤ。うらゆりハそシる。
のりのいシあらハ。さやトうくトの内ミそトうくマつル
御ハ神カ樂ハ。御社御名す去年サ紀ア。あうきそハ。
いとつトきりトきりト代サ。こくクおとトうトりトあシい
まひハ。うきトうきト人カうトがトとオれトあシい
まひハ。あうひのあとモうト。うシくトくモうトあシい
アトリト。うシくトかトりトいトきハ。こよシくトくモうトあシい
うシくトゆのゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。
うシくトゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。
うシくトゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。うシくトゆハとシいト。

高木のサ九
吉くまく
九月廿九日
吉良寛弘
三年十二月九
日

ハ。おひとき。ひとがり。きり。やく。まゆ。ハ。い。ま。い。ゆ。す。
異履
くつひゆ。まゆ。まゆ。まゆ。

弘仁內裏式云
中勢省率待從
內舍人太舍人等
各持桃弓革矢
陰陽寮陰陽師
齊卽執荼具方
相一人著假面
黃金四目其衣
朱白裳右執戈
左執矟振子弋
人同著紺布衣
朱袜額共入殿
庭列立云云

火
ひとおりとよ小ハあへ。あくされ志。ひとよ
そ。とよかうもえおもにれも。まづあひ
く見えんと。門はとあらふとれも。三
人
すくあもそにくまつて。三人
挿
ゆづりわざ。在きいこきアサリキ。
鞆
蟲
御厨子
籠
儼
御厨子
内五
御膳宿
刀自呼
恥
怨

式部丞とす。もとまつりて。さうのう。いわ
とく。まひひとく。うきはくわく。くわのま
えひしひやるもあく。うづひかとら。いふ
うわうわう。うそゆ。おあぬよあゆう。

うて、うせて。あのへよきふ。ほづらはうきくへきくう
きく。うきもくみてあはと。もくすまくはりますわ。

おうゆきとゆみのうた
寛弘六年 坎井上 戴

ひまわりひい。大納言の毛。やうそくはうらの日ハ。くまか
えひすめ。うあハ。おうえ。比するの意。二日。う。う。う。う。
蒲 葡 紅 梅

皆練堂表
わたりのかいりよらむまみのうゑ、ひろきりあも、三日
ハかくあさのうゑうまむ。うゑあはともうのわたりもの。

薄一注上

佩劍

筆すにづきそまゝのわづき。ゆきあるの三三七
くとまやつ。ひかゝれうちうり七七。ひくへ成
めひくよくまき。うよらか文つるのうきりんの
あ。うひうめひうけり。うきのうんとが
神
檀
固

た。がひとくがどく。そがまのま。あ、あ乃
う。むこうりんとちくとあうねも、とかくめうす。
とかくまよかとあうねくうひ。まくでやう

どひりてからう。あきたらむよ。
腕 頭 最 濃

太幼毛の毛も。さてやにらひとひも
人のももうううううううううううう
肥

。すとそしゆうに。うるわしきよニ。もんづり。のまうり。す。

良數龍
麗宣旨少

まよひうち。せんのむらやけのひとはもやう。

もわて日暮、か
くらむとくらむの
よもやあ、この次よ人のうち成かう。こゝへもせへ。

ひへや。奉相のあいふの三條よ。ふくや
だいこゆめ。かくらうりんが。
ぬうううう。こりそゆにこすれくうらほう。らう

一くで。ぐらつみにちうりけきもやひやうがりこ
そくう。とめだくじとくち
ほのふぞぬひとめやどくふうくわく。まく
おうとくすいとく。こサ将の志。ごくとねくあて
へかまめ。二月ハナリ代より柳のまよあす。やう
あはううけ。すてがくまく。ふくかとむる
ふとふらりひとくがまくやうに。ものつこく。
もらひ。あまくえく。さまで。こあるうて。まく
かくへすく。ふくよりて。ひつくるくわく。やく
うよもひひそて。せうとく。あひりづく。にロリ
ゆき不けいほく。あまくうろめくをなう。おの内ばそ

影

護

華葉子葉裏上

籠

腹

黒

又ひときをりく。だけたうり。たはとすふ。ゆく
とぬすくつ。るものく。ひめゆくやく。ま
ゆまにうたう。おうけとく。しとねわく。ひとわく
まく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。
ひとよもれ。かくらつ。んう。まく。ひく。
あわううけとく。とく。とく。あわい。まく。づく。とく。
ううにうく。ひく。ひく。ひく。はゆく。ひく。
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。
人ぬりにあつまへ。うう。えん。うう。うう。うう。
が。が。が。が。が。が。が。が。が。が。が。が。が。
く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。

様

愛 故

額

最

脣

うに人のひすめとあはゆう。ことあま正
きとやくまよきふゆう。そくハ敵上人のあく
まもく。おれをうそて、かくしのきよと人

限シテ
侍シテ
從シテ

楊子曰膠柱
謂瑟云云

善あらず。わは、一ゆふ。まきうへるはもゆうてとや
ね。尙院よ中將の毛とひぐはり。向仰たま
わくて、人のうふをかきつた文と。又多く人ともそ
尼寺や。おとこもえんよ。それのとせよがゆく
よ。こゑひへむ。と、畜生よの人へ。すく
りさやうにふとゆくあら。凡ゆよすらうとあら
や。かほをうとくとくの人のよやうと
ゆくとひびきとれ。かくまよわれうとかと
のふか。かくまよ。院と。かくまよれうと
人のよし。また。このあひて、院と。そに
うとくとくとそゆ。まかよとくあれど、

奥無
り成つて、中よがふのわすれたりとも、
ゆくへまづすとしれ本ばかりすうじる方おほ。
かの院文よまさうひや。うとよそちうねれと、
そわひもひづく。かのああき名なめ。ひはくびごと、
あくまくとがゆう寛。うめりたあひゆう。
嶺媚よ、ふつまつたよも。まのあくわうりゆく。
まくらうちの成せいりゆく。うしらんは、や
かうくよどきしゆうま。うしらんは、や
ゆれ凡軒。うひゆく。女拂后えいをすい。
うのゆくのは、もととひあく。うひゆく。

あくべとぬひことてんそあーしま。やくもうらでし
あくゆきあとすり。あれは人のふうりうへと
りまぬめり。たゞかあきとをあすふく。おま入
りんかこゑじ。えぢともおひててうみよ
ウカツさ。おほとおれくくわあり。お
あきひくりりんのうといたなり。一まい。
春信卿

まのあま

啓

まのあまきうじ。おのせをせぬことありけ
りにゆく。ふこめぬまよらうへたひく
候とから。又あひてもあよと成るくく
のゆへくもゆく。おと葉のキラキラするも
のとよきにむね。ねづきもくと

およ光うともやく。あいかきてうれ
ほのうがうすとひよる。ほの人のふうをゆくま。
かうまらひがうめれ。こよみにあて人もみがう
きよがく。まめうきのりをかま。ま
みくよく。うらめく。太納云くまくじと
おなじく。まんく。おままで。づりのうり
うれ。うらめく。おまく。おまく。おまく。おまく。
罷
ゆうてゆく。うれ。うのほのううらめ。まのほ
にまうあれ。わどをき。せうめい。まのくふくせア
人あつううくにほのうかつてうの人あいぢ。ハ
まゆーきふらひ。あまううく。人こか。おまく

このまことにとうされてもよへぬもあらず
にゆる。女院ひとりの人をこゝに遣れとめふる
やうとてヨリ方乃こところあり。ほのんが人間も
もの代もうそとめーとおひひあつてんうスヨリ思
すまんとくらへてハヤシ。ワタんせりらひんては
かくへいきく代。さはりと。まじめにうにぐりき
小引。よし代。詐 誇
のき。よし代。まのうのうそ見へあう
かくへいきく代。わをみく。刃をもにだせとくり
くへいきく代。和泉式部
くへいきく代。いつもまよとひぐくそ
にぎりうがきうがき。されといづみへき
じそれ。うちうけくまくにうにうのうこま
きえあく人。うあいとくわあひも刀でぬめり。うこひと
わくへいきく代。のむねをうかとく。ほことのうきく處
よそをゆくあれ。くらにまくせうかとくりふ。うくと
くへいきく代。めふとまくとくりふ。うくと
くへいきく代。口よとくのうきくあくとおぞくす
うちには。くへいきくまくとくよみやとハ景とゆくを。
まんぐれこのわのうきく代。ま殿がとのうきく代。
ゆうひう東門とくうつゆ。とくふやまとまくはきく
ね。ゆくとくゆくへくすみとてまくのとく

つきともみらうるねと。すこちかうは。もれにあり
ゆのときも。そぞろもくらつむよゆき。やも
せはうるあきのうりおきうりうらえうみて。
ゆめりく。うひもあといても。これにてありひる
人多くも。とくくわざくゆうゆう人。はうりゆう
じもあうるいゆうゆうゆう人。はうりゆう
うち。まがうれらしてゆうやくも。くこれもま
とすめとほう。かくはよあとかく人とありひ
みゆく人。ふくと見かくし。がきをうての
ゆく。えよなうめく人。ふくとすくもくわづくも。
あくよすみ。たまがと見むくあけく。
堪

斯 情薄

凄

不意

あつううううくらうれうるあくとなくふゆう。
うのあくふくうめく人。もと。いそとくうゆくん。
かくにつきて。一ゆのあひひつてとくううとくくて
きくねゆく人の。ふくりとおれのまのとをあたそく
たあひゆく。うのかせうせぬ。あおりしまま
秋の夜も。うにあぬくがあは。ひと月やいゆ。残
ゆそんと。うあうあうあ。うゆとやうゆゆう。
せの人がいしといひゆく。うかうかうかうかうかうか
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
うちにつくせん。あひつまくわゆ。ゆうすく

おこしようねひととくとうか
ては。あけき
くわうとすりんやうんと。ゆくとまく
いも。とこゆとあくまくともはれ。
くわうとすけづらうして。うのとこじくくあ
くよ入をあづ日。とくらうせかみひゆくまく
ううづりく。せうてたまくはくとくらうまく
まくびうへつ。琵琶風子左
かほきうづ風子右
めひうよ。さうあものかうれば。えものくじりのま
かうじる。じうくとひらまくあまとうくもは
と。かくつとよぬとよつととむる。人風子右
武部太宣考下

ううにほてすく人もとくか。まくとづくく
せあくあくめり付。一卷
女房かほうきうきおきくおとすれと。ほきいも。はす、
絆くわう。がてう女めうさんかくまはく。じうへそや
もとふんはせいとく。もくくくくのく成まく
ひも。わいこくう人のりとあい。のらきくらめくうと
みねたり。からとくまくくわなはれひく
くやとくや。かくもくらめとあい。もくのとくまく
るあく人くわう。もく行つまくくわなくわな
に。かくとく。こくまく。とあひうちにくらひ
軽くわう難くわう

数珠業
三言
我仕
益
庚
心
筆

人をも。あざわらくやうま。うとうとて人
がつまふ。うとくそとのゆふおちかあらば。
してうめりてむれ。うめやとくし。
あめくくあめくく。うめのくじ。うきの
かくのためためぬめん。あせとくすりぬ
にくうへゆうき。我へとくすく。くらりひき
きくくくすりかく。がくよつをくさし
きくはく。うのくくめとくま。めくくくめ
くがくをのほゆあとく中よ。とくとく
もれて。うくうちてにも。うとくせはだつをくらゆ
きくはく。ゆづひすう。うらういとくとくめんひと。

今うへうちたとすとハキナムアシモウモトモ
らモワシモトモササシカレ。人の心をもきかくう
モウシトモの緊りも、さうも
つゝまかうゆうゆう。人すまてまつひとあそそつゝも。
ヨウシトモ、あやまちうんも、ひきうんも、う
めうおほえゆう。ふとくううんく。我とまくひも。され
ばなぐくとおひううひへくれと。うもえあく。
三ひくうたすすり佛す。三やうとそくうわ
さや、ほときはまづくかじうよにうぬみせの
人。おづくさんへけりあつ。それとくわまうく
いもんといみーとモの緊りひつを。びひねくき

とよへり。さて。史記とひよかと見作
あひつ。がのん。まことこどり。わざと不ともあや
ミサカモそら。敏^男
う。あのうにくわへ。おやいぐらか
つゆよかけしゆ。さきれとくふきゆ
人。ひふももまやくとものいはめく。やうく
のりをすとめてのら。いらとり。とまうだ
ね。ひととてよわき。くゆ。みづぬまとひ
きんわゆふもせきめとけりてゆ。ゆくかく事
は。ゆく。いりんもつえまくしてゆ。じらんとも
ま。ひやくぬのかくす。いふ。まわねふと
屏風紙

やとまのたままで文集の下へもとせなかつて。
うちまわとあらめをまくまかほひフサイ
ふとあひて人のまづあらひにわく
乃夏アムナリ。樂譜とソヌミ。ニクリシモ。あとさく
かうアヘ。アホニモセシモアガル。アヤリ。まも
アヒモセシ。殿も。うちも。ギリヒトモセシ。
ゆきともとめてアセセセセ。はてま
かうアムセシモとすりと。アムクのものひの内情。えさう
テス。アムアム。いふをアツコはんわと。さてせゆ
とり。アムキアム。のに仰りま。いふはアハヤトイミ
リ。角

あらかくまうとあひやん。せのいと、
までつあへりをもせりてすてられ、びとまよ
みんふきいともゆど。まひらにもし、
くも。まにのはぬかとのあたうてまやうんほ
り。うるよやひゆうかり。うるよや紀日
ききてゆるひうあれうれいをきて、じこめう
ともえうくもとふもつたゆさまうりはんわと。
くち人きのやうよととが、あかうかううう
ととととおひゆう。それつぬくさん、まくまく
もふひゆう。またのせあくまくあまくわかく
わく。まくいよつきて、そし
解急
猶豫
息
罪
真似
微
聖經

つけぬめども。身のうの
うれよても。肉をとて。
まへあくとひこえすとも。か
ゆ。巧とつまむ。まき
ばらせよ。又角えんあくのや
うととくかせば。うそてん。せ
まへもほくそゆ。おのづほんこをば
うやうかひ。むおおびとまのをつうに。このまを
うのらぐのかしもゆ。うに。とおりひ
ゆう。うとやうきうとわくまゆ。みへゆ。まと
によひらうて。うきうが。えもゆ。ねふく。

落
たとくそゆゑん。それかふくらへてもりうきあひ
」。かく世人のまゝくらすにうちめられ
は。少とおりひすてぬふのもかうぢやうへまれ行さん
みゆゆん。一日あつ月えくらへりくせむ。御車よ
このうべへいおにのうてうづきう。それうく
とくれてまううう。教化とあゆまとあゆ寺のうけ
懺悔白塔注
興
まううう。あもしゆうしたらめあゆく、あゆてうあひて。
すううううう。ばねれわいだうけう化も
説相あゆくサ人あく。あれうておゆうううう
淮

或僧正師云
寶函印陀羅
尼經曰況有衆
人或作塔形
或罪障悉滅
斯如如意

あく。あとで、おとしのあじへまよひて、まかこもつまう。
うそよ。こたうのもんじて、ふしみふとあけよ。
戸をまつ。いまはこまうだらう。れうりん城
いまほにまうだらう。れうりん城
とみて。まのたまはわびて、あらうめのよはい。
きうち内と。宰相の君まと物、うつて、おまへあまえ。
うりさげぬまうい。うちもどもたまう。月あや
ちにうりさげ。やまうる連ひやうううふ。
かねのうりさげ。せうううたまう。くゆゆりり。
大くらひりさげ。まうううすまふ。とおもひても
つまう。あひやすて、わうううあれかう
うかみき。みどりうらうらうも。こそまくらぬ。おのうら

かやれいとへごつゝひとづひづと。うつをせしるよや。
太夫徐福文成謝誕には くわらき ほふ あらと
さぬもさよかうひまめく くわらひ。地のうねるまくうひ
くぬえやくかきあくせう。あく月くみれ風のきくひえ
うふくわく。もうあいこもふくわくたくすくう。
様式のや被れまよあく。このへんらんして。き、のまわ
とももこてんすうはつてにじめえくまふされすう
ヨリカくめう
見ゆのとあつたあれがほんのうてすくうゆくとすく
まうもあられ
今まわねりのせまれうのまくまとへくしきとまく

紫玉言用言僕言

十一
六

寛弘六年十月四日一条院焼十一月廿五日第三皇子誕生十二月廿六日中宮入内
大月三日まであつた代りにこりらわよ月くす
頬通卿

うのやせはよ。ひととにこよ上らもまつてあつ
懷間

餅戴

うのやせはよ。ひととにこよ上らもまつてあつ
かほのひ、かまふし、ひそく。うのやせはよ

うのやせはよ。たまのやせはよ。うのやせはよ。うのやせはよ。うのやせはよ。

皇太后宮 東三條院

の君。まゝいのもの。くえわひかと。ふふひやう。花火と
うよこやうふにうまつ。がまあけうううちをと
ひまうがじちゆとふふみ。ひ。うか
女官音すて。かやかくもせ。うううちさいらそわすり
大學
たうやくまむれ。きいのううもなう。二日えの大餐
ハトアリ。陳内客源し。おぎとぞうり。ひて例
ハトアリ。かへらめハ傳太納云。右大將。中行大支
公任卿正光卿隆家卿實成卿道綱卿實資卿齊信卿賴通卿有國卿賴定卿行成卿
は条大納云。梓中納云。侍従の中納云。左清つ替。ありくふの
宰相。大益源。左清清翁。きん宰相。じくひくねづみ。う
源中納云。左清清翁。左清清翁。ありくふの
長押俊賢卿注前兼隆卿

例のとおり
あひとハ生氣
は色あり生
氣北るゆめハ
綠色あり

膏藥千瘡

例の事せひも
とハ祝詞曰命
幸カタカレノ
言ラ云

てき注上い乃トものいもせり。うくに、とこトおふ。
うよトありたまトとおの經ハシ。うかト神カミと
みトおく。あトさいうトうくううトえおでア
うく。右大將トきうトうき。うまトうき。うまトうき。
うく。左大將トきうトうき。うまトうき。うまトうき。
の意ハ努力ハシメテ。うくうトとやひて。うくうトとやひて。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。

拾遺集春
壬生忠峯

三よけよ。うきをかすかす。うきくくく。うき
れす稟。うき氣。うきよ。ひくうわく。うきよ。ひくうわく。
足をうくふ。がくじつ。うきよ。ひくみさに足をう
く。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。
うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。
うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。

のひ五十日。五月十日。お嘆おひづるみこりぬの思あげと

明

て。そぞくたゞくあつて。イゆりおどり。まのあす
あゆう。やうりのつり。とひとひ。あもせで。う。足
うとすはとむとし。ひとひよまつて。ハホトシリと
廻して。まて。行。殿うきこまき。うみよもくあんも
うとすりかと。うにく。それとあれもううと
し。うとあきし。ひやもて。かん。日。とけて。まうの。ゆ。
かのあからくのやうりのうらた。あくまわく。あ
きい。めぞう。まら。ゆ。お樹よりえを柳のかく。あ
もの。まくめ。ひ。め。ま。れ。ハ。ど。り。も。う。け。づ。く。そ
う。や。す。う。う。と。十。せ。く。う。ま。の。ひ。う。に。ま。う。り

例

摺

櫻

うつと。おれ。ま。あ。ひ。ハ。被徳子三位。と。く。人。く。に。ハ。
こ。太。ま。オ。邦。う。ら。よ。ハ。ニ。サ。ね。は。と。う。ま。い。ミ。ら。や。う。の。中。よ
ニ。ま。う。あ。く。か。く。ま。い。あ。き。見。れ。光。あ。ひ。て。ま。う。き
ま。と。ま。う。あ。け。な。り。ほ。ま。が。く。う。ハ。ゆ。が。絶。一。小。口
き。あ。ま。き。の。れ。お。井。乃。は。そ。う。と。い。り。え。き。柳。
山。吹。の。ゆ。う。う。お。ひ。そ。め。お。柳。の。ゆ。う。
あ。ち。乃。は。う。う。じ。り。う。も。お。そ。め。つ。く。い。ま。う
き。ま。わ。う。あ。お。ひ。ま。そ。う。あ。し。ハ。こ。の。わ。く。に。や。う
く。ほ。丁。の。ま。あ。う。み。あ。こ。う。ぬ。よ。り。て。も。う。あ。ま。う。う
う。ハ。く。く。あ。と。ひ。め。ぬ。う。ら。れ。う。ゆ。う。ま。ふ。り。の。く

西の。ゆ。り。ハ。ゆ。り
直。衣。ナ。リ。小。只。
紅。小。口。袴。ナ。リ

したまほうらーて。うかふくらーりへ。かく
あらきもひうらー。えひうめあらきのこらだ。
ひりんのあらきうらよ。さくらうらうらうらうら。
人かまうそく。ひつとなくつへ。うら。神くらめあらき。
さくらうらうらへ。ほまのわとうりとて。そらの
んづらめ。敵上人懷平よそいへ。うらへ
からに宰相宰相の君あくらむ。うらへ
あくもゆく。まくあくひのりをくろす。こたま
はれもねーうらね。うらうらとひか。うらすきいつ五がれ
あく。うらとあく。源式アハニヒヌニトモイアやそ。
まくゆくめり。あくのあくめくらへとや。それある

うちかとまくらむちかーと。うらへあくらむ。
かのうで。うらへ。うらへとあくへ。あくへ。うらの
よくりゆうりひよへきとあくと。りらぬまのとゆ。
うらへと。はいかとまくと。ひうれどとあく
ら。うらの女房ハナ丁のあれりての。ひうれまくへ。
うらがうれすやうて、あくかく。三位とくへとく。
内侍のときうらむ。あまくまのわく。まのくへ

ど。あきーのしも。東のひきーのあれうらー。うら
くみとがきうに上らうへゆく。み丁れひくー。うら
くみぬすうーあくふ。大納戸代御座。こりぬの君の船御座す
す。うらゆれてうら。うらひくあきだ。うら

まうすと。おまのわへうす。づひつゝうと
が。すのこにかしきに。お^内公^上にてうんら先。お
おうちれお^内殿^{公季公}いとの。まもだまは余大納言それもあ
ハ。えんゆううた。はあそひあ。敵上人ハみのまの力
ありふあうへうらうにうづぬ。比下ハうこまわ
りけまのあそぶ。一きよやのあそぶ。やもま。
あそやうの人^上。うよは余大納言。もううと。并
琵琶筆^笙ひこ。といたの宰相。中將^笙うのあえとそ。せうてうの
よも。あがそ^{安名尊}うと。つとふ^笛う田。このあがくう。
うのわ^鳥。とくのそようとあそふ^外のうだもくう。
かととゆく。辛に^{拍子}うじうじうくとくめう。のせ。
伊勢

海右のれ^{大臣}和琴^琴。雜禮^禮。うん^上。おとく^下。
うしゆ。し^上。うしゆ。めうり。うそに。ひいみ。うやまら^結。うわ^惜。
うそ。うそ人の身^寒。ひえゆ。う。ひとくうきのよと。う。若
いのき。あともとを侍。

後附

寛弘七年十一月廿八日遷新造一条院 中宮同行啓

寛弘七年

左大臣藤道一

右大臣藤顯光

內大臣藤公季

左大將

大納言藤道綱

傳

藤實資

右大將
按察使

權大納言藤齊信

甲子
大將

同 藤公任

皇太后官大夫

權中納言源俊賢

治部卿中宮權大夫
十二月十七日正二位

中納言藤隆家

權中納言藤行成

皇太后官權大夫
侍從

同 藤賴通

左衛門督
春官權大夫

中納言藤時光

彈正尹

參議藤有國

勅解由長官
三月十六日修理大夫

權中納言藤忠輔

兵部卿

同 藤兼隆

右中將

同 藤懷平

右衛門督
春官大夫

同 藤正光

大藏卿

同 源經房

左中將

同 藤實成

左兵衛督

同 源頼定

左中將藤公信

藏人從四位上
內藏頭

少將藤濟政

十月廿五日
右中將

藤教通

從四位上

十月廿八日從
中將加元
十五

藤兼綱

從四位下

藤忠經

藏人正五位下
正月七日從四位下

藤定賴

二月十六日元右
十二月七日正四位下

源朝任

藏人從五位下
十月十五日轉任元右

藤賴宗

十一月廿八日
正四位下

右中將藤兼隆

源濟政

十月廿五日任

藤道雅

從四位下

少將源雅通

二月廿日兼
木工頭

藤定賴

從四位下

藤好親

正月七日從五位上
左兵衛佐

藤經親

二月廿五日任
元左衛門佐

蓋聞斯書紫式部之所記也式部寬弘
三年之臘始官仕 中宮後號上東門院是也若
其博覽俊才則固世所徧知也其宦仕
之間見聞所及進退所經聊注錄以成
一書其雅趣藻詞實與源語相爲伯仲
然此書本非日次之體而呼之日記者
未審姑且依舊題不輒改之其間難解
者畧標記傍注以便看讀門人谷村光義

更撮取言五節舞姬之事者以附後而與本書相發遂附之剖闕以與于門下之士云爾

享保己酉年黃鐘中澣壺井安鶴翁

後補

○太嘗會本朝月令五節舞者淨御原天皇之所制也。相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髡髮應曲而舞獨入天瞻他人无見舉袖五變故謂之五節其歌曰乎度綿度茂邑度綿龙備須茂可良多方乎多茂度邇麻岐底乎度綿龙備須茂

光義按更
有本據在

○續日本紀聖武天皇天平十四年春正月丁未朔壬戌天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田

○舞訖更令少年童女踏歌○同十五年五月癸卯宴群臣於內裏皇太子親舞五節云云類聚國史嵯峨天皇弘仁五年十一月壬辰宴侍臣奏五節舞賜祿有差

○本朝文粹善相公清行十二箇條五節臣伏見

朝家五節舞妓者太嘗會時五人即皆預叙位

其後年年新嘗會時四人無預叙位之例由是至于太嘗會之時權貴之家競進其女以宛此妓尋常之人皆辭道可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪轉進之伏案故實弘仁承和

二代尤好內寵故遍令諸家擇進此妓即以爲選納之便也諸家僥倖天恩不顧靡費盡財破產競以貢進略

○雲圖抄裏書

五節次第

廿日舞姬等參入裝束畢後

預藏人觸其由於貫首

大歌參畢後可申歟

藏人頭秦聞

或令藏人奏

次御出

頭以下前行秉脂

入大師局

殿

同入給他公卿徘徊馬道邊隨所便宜

或上轎丁兩參入

云云

次舞姬等參

必無次第茵几帳各以具之薰爐持隨髮立

入相副參入半帖上數茵前立几帳組立舞

之時撤件

預藏人每度搔起束帶次大歌發歌

笛小歌次舞畢退下六位抱之次還御○寅日殿上相和

淵醉朗詠今樣三獻畢有亂舞次第略之同夜御前試預藏人奉仕御裝束尅限大師參上預藏人催之次舞姬依次參上或無次藏人頭於南殿西腋戶下禁察陪從闢入免入者髮上一人重凡童二人持薰爐等自餘不參次殿上戶右青璫門閑之不開次主殿官人自北廊列立庭中舉炬火次大歌參上著座次發歌笛次舞畢內侍宣可返御歌之由次藏人頭問大歌人御物忌之時不問其詞云誰○卯日宴飲如昨日童御覽奉仕御裝束后御所本宮大夫若親昵公卿官司奉仕之次御座定公卿候簮子敷

○
或賜圓座但不賜故實也次童女參御前雲客副之或召次下仕參藏人副之各一所事畢次第退入夜行幸中院其儀在別○辰日節會次第畢及三獻大歌發歌笛先是舞姬參上候御後下小忌太盤之後舞姬參上髮上闢司相副於第三間列舞主殿女媧四人秉燭照舞畢舞姬退下歌人退下次入御織物褂一領茜染打褂一領織地褶裳一腰茜染三重袴一腰扇一枚鞋一足○已日赤色唐衣一領衣加祿蘓芳末濃裳一腰茜染打褂一重同三

重袴一腰扇一枚錦鞋一足。辰日 日蔭鬢赤

紐青摺祕傳唐衣一領泥繪裳一腰茜染打袒一重

同三重袴一腰扇一枚錦鞋一足。○傳唐衣裳

○童汗衫カミ袒單表袴下袴扇差櫛物忌カ高半
紅薄○

下仕袴打衣單唐衣裳袴○撻洗上雜仕等裝束略之

○神代卷磐戸段猿女君遠祖天鈿女命以天香山

之真坂樹爲鬢以蘿蘿比舸礙爲手繩

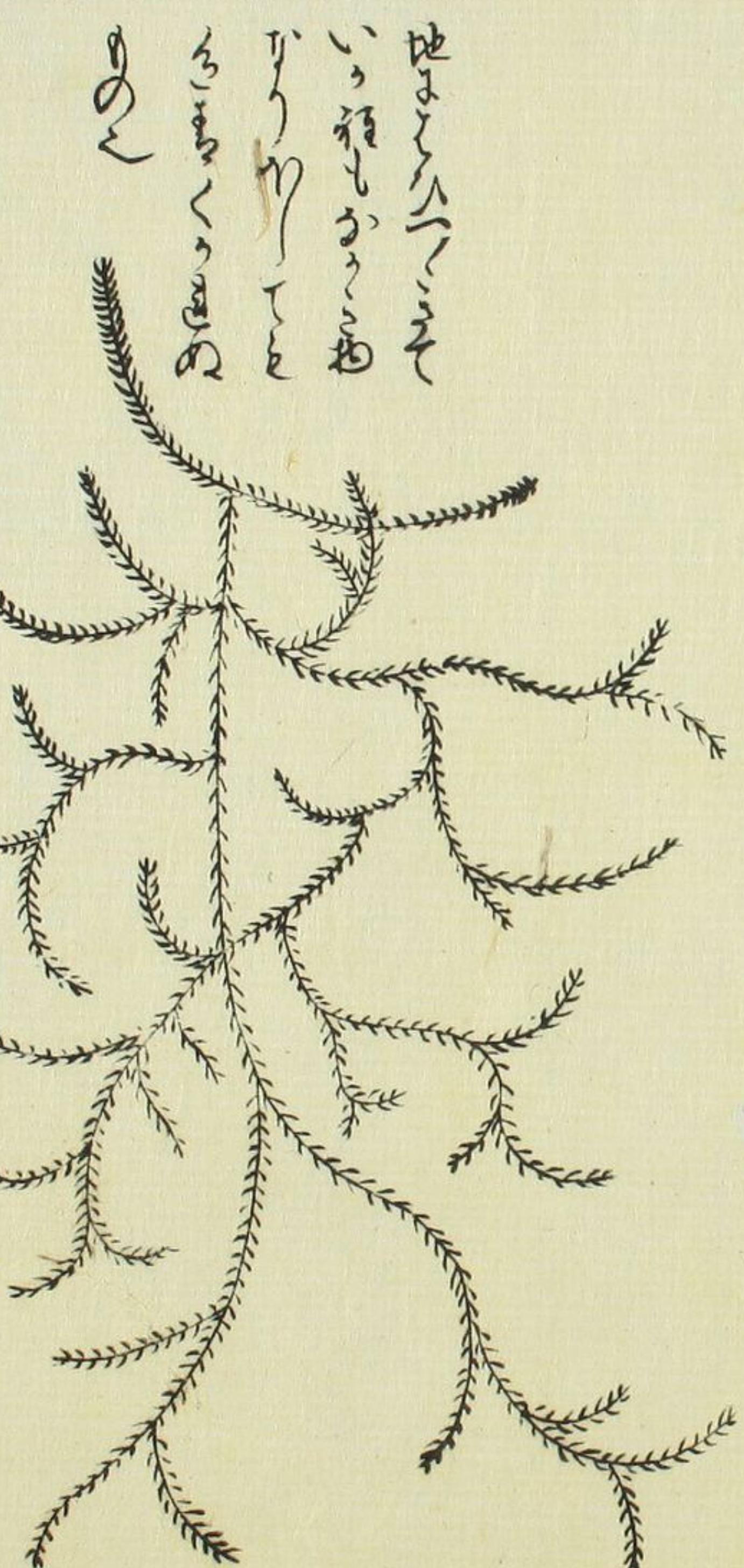
略

○延喜四時祭式供新日蔭二荷

略

○和名抄苔類蘿唐韻云日本紀私記

蘿日本紀私記



義

按日蔭ち蘿か又ハ女蘿カツラ或ハ下苔サガリコウ

俗名よ梶ヒヨクアメノサウメトシナリ則我雄德山オトコ

多くうり想にて北山ヒタチの湿地よ生スル也

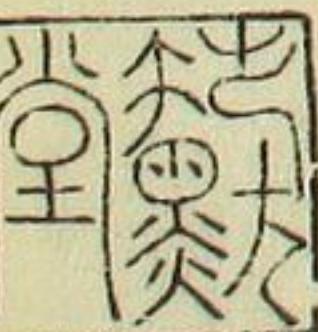
日ノけ代^ス代^スハタ^{スキ}用ひ^スき^スト^スリ
延喜式^ス日^ス陰^ス二^ス荷^スとあふ是^ス但後世よみて
白糸とより合^スああまたよくみくあく人結^スと
いひ日^ス陰^スアラ^スと名付^ス男ハ冠^スのたお^ス
八筋^ス組立^ス一丈二尺^ス計細^スそろりかく^ス或ハ高魚^スと組^ス
用ひ^スうし^ス人をあく是^スとく葉^スよち^スと冠^スのかん
うよゆく^スじくた^スひも其の葉^スとく梅の結^ス
花^ス枝^ス付^スと

一日侍^ス于^ス老師校^ス紫式部^ス日記^ス之席^ス以^ス其中
有^ス五^ス節舞姬^ス之事命^ス余^ス錄^ス其可^ス興^ス之参考者^ス
故嘗^ス謄寫^ス所^ス聞^ス就^ス而正^ス焉則附^ス之^ス于^ス卷末^ス矣
最不堪^ス報愧^ス云^ス爾

享保十四己酉年臘月下弦

石清水社士

谷村光義



官位裝束指掌圖

全部一冊出來
折本懷中本

書林

大阪心齋橋通南本町

河内屋儀助

48/7 HNW
C
2

